

書評

フィリピンは何処に行くのか？

浅沼信爾

客員教授

一橋大学国際・公共政策大学院

Jonathan Miller, *Duterte Harry: Fire and Fury in the Philippines*,
2018, London: Scribe Publications.

この四半世紀のフィリピンの変貌は眼を見張るものがある。20世紀後半までは、「東アジアの奇跡」に沸く東アジアと東南アジア諸国と対照的に「アジアの病人(a sick man in Asia)」と評されてきた。第二次世界大戦後からの数十年にわたって国際社会の期待を裏切ってきたのがフィリピンの歴史だった。ところが、今日のフィリピンはというと、このところ高度成長が続き「アジアの希望の星」(井出譲治『フィリピン: 急成長する若き「大国」(2017年、中公新書)とさえ称される様変わりだ。同時に政治面では、その極端なシニシズムとポピュリズムでフィリピンの政治と社会の脅威になりつつあるドゥテルテ大統領が治安維持の大義を掲げて民主主義と法治を破壊しようとしている。いったいフィリピンは何処に行くのだろうか。

クリント・イーストウッド演ずるダーティーハリーに擬した「ドゥテルテ・ハリー」のニックネームを持つ現フィリピン大統領ロドリゴ・ドゥテルテの罪状を調べたこの本の著者、ジョナサン・ミラーはアイルランド北部の生まれだが、彼の家族は四半世紀にわたる東南アジア滞在の経験があり、自身は30年におよぶジャーナリストとしてのキャリアの半分をアジア各地で過ごしている。何かあるとワシントンやニューヨークやロンドンから飛んできて判ったようなことを書く国際報道記者ではない。ひとくくりにアジア・ハンドと呼ばれるアジア通の練達のジャーナリストの一人だ。

ミラーが書くドゥテルテ大統領の罪状と人物像は読者に戦慄を与えずにはおかない。こんなことをする人間を一国の長に戴くとは、何を意味するのだろうか。その長の下で、国自体はどうなってゆくのだろうか。ロドリゴ・ドゥテルテは、フィリピンの南のミンダナオ島の南岸に位置するダバオ州知事の息子として生まれて、マニラでローヤー(法律家)としての教育を受けている。フィリピンの上流階級、しかも世襲に近い政治家家系の出自だが、青年時代から根っからの不良で、今でも「好きなものは銃と女とオートバイ、嫌いなものは麻薬と犯罪と儀式」と公言してはばからない。フィリピンを支配するエリート階層の反逆者として「庶民の味方」を看板にダバオ市の市長選に打って出た時には、ダバオは「アジアのニカラグア」と称されたほど殺人率の高い地域だったが、「皆にとって俺が最後のチャンスだ」としてどんな手段に訴えても犯罪者、特に麻薬犯罪を撲滅することを公約にした。そして実際にダバオ市長としてダバオ市に君臨した20年超の間にしたことは、現職の警察官やOBを「闇の仕置き人部隊」を組織化し、一千人を超える人数を超法規的に処刑したことだ。ミラーは、詳細な現地調査から「ダバオ・デス・

スクアド(Davao Death Squad)」と呼ばれる仕置き人部隊の存在と彼らの活動は証拠があり証明できるとしている。ただ、ことあるごとに「殺してやる」と叫ぶドゥテルテ本人が直接手を下したという証拠を得るのは難しい。彼はローヤーとしての訓練を受けており、その知識を利用してうまく自身の関与を曖昧にする術を心得ているからだ。またダバオ市長当時に当然のように汚職がらみのカネの流れがあったが、法的な曖昧さの技術で証拠を消してきた。

ドゥテルテはダバオ市長としての業績をベースに大統領として国際舞台に進出してきた。そして、フィリピン社会に蔓延する麻薬犯罪を一掃するというダバオ市以来のアジェンダを今度は全国展開すると公言し、また実行し始めた。ダバオ・デス・スクアドの方法論を今度はフィリピン警察全体に広げ、またそれにフィリピン軍を加えて、大々的な「麻薬戦争」を始めたのだ。仕置き人部隊の活動方法はダバオと同じで、まず非合法組織のどこかで容疑人リスト「ヒットリスト」が作られる。そして影の仕置き人部隊が容疑人を闇に紛れて処刑する。既に2万人を超える犠牲が出ていると報じられている。

フィリピンは曲がりなりにも法治国家で民主主義国家だ。ダバオ市のようなドゥテルテ一家が勝手気儘に支配できる国ではなく、ある程度のチェック・アンド・バランスが働く。当初から人権擁護の先頭に立つレイラ・デ・リマ上院議員や元反乱兵士のアントニオ・トリリャーネス4世上院議員などがドゥテルテ大統領阻止の運動を続けてきた。また、2017年8月に起こった17歳の少年キアン・ロイド・デロス・サントスの警官による射殺を契機にフィリピン社会に大きな影響力を持つカトリック教会も反ドゥテルテ運動を開始したようだ。しかし、問題はそうした運動の抑止力が弱いうえに、むしろドゥテルテ大統領は市民の言論の自由を奪うことで反対派を抑圧し、独裁化を推し進めるのではないかという懸念だ。反対派の上院議員は二人とも逮捕された。ドゥテルテ大統領はミンダナオのマラウイ市がISのジハード戦士に乗っ取られたのを理由にミンダナオに戒厳令を敷いたが、これをフィリピン全土に広げるのではないかという怖れを口にする人もいる。もともと独裁者だったマルコス元大統領を信奉するドゥテルテがフィリピンの独裁者となる可能性は否定できない。

ジョナサン・ミラーはこの本を通じてドゥテルテ大統領の人類に対する犯罪を暴き、それを断罪した。アジア通の国際ジャーナリストとしてのその功績は大いに称賛されるべきで、なぜこれがフィリピンのジャーナリストによって行われなかったかと悔やまれる。しかし、これはあるいは高望みかも知れないが、わたくしは東南アジアを良く知るジャーナリストには、個人の断罪を超えてして欲しいことがある。もちろんそれはジョナサン・ミラーの次のプロジェクトかも知れない。

東南アジアでは、時として人類に対する犯罪と呼ぶに値する集団による大量虐殺が起こる(Michael Vatikiotis, *Blood and Silk: Power and Conflict in Modern Southeast Asia*, 2018, London: Weidenfeld and Nicolson)。1965年のインドネシア(Geoffrey B. Robinson, *The Killing Season: A History of the Indonesian Massacres, 1966-66*,

2018, Princeton: Princeton University Press)や1970年代中頃のカンボジアのポルポトのような政変がらみの大虐殺は別にしても、1980年代後半のインドネシアでは軍に関わりのある闇の「忍者部隊」と呼ばれるグループが犯罪者一掃を大義名分に超法規的な死刑執行をしたことがあった。入れ墨をした男はヒットリストに載るといふ噂が立って、繁華街のトルコ風呂ががら空きになったと言われた。また、タイではタクシン政権の初期に麻薬戦争が始まり、やはり超法規的な闇の処刑人グループ（警察関係者と言われた）による活動があった。だから、いまフィリピンで起こっていることが特殊フィリピンの現象だとは言えない。

しかし、このような超法規的な殺人集団が生まれ、しかもその指導者と目される政治家に一般国民の人气が集まるのは異常な現象だ。なぜそのような現象が起きるのか。それを陰で指揮するあるいは煽り立てる政治家のサイキックな資質や性癖を超えて、東南アジア社会の深層に政治・社会・経済的な特異な構造があって、それが権力者の超法規的な行動を助長するのか。わたくしが恐ろしいと感じるのは、2万人近い人たちが闇に葬られている事実を知りながら、いまだにドゥテルテ大統領の支持者が80%近くにとどまっている事実だ (Social Weather Stations)。もともとフィリピンの政治体制は、「カシケ民主主義 (Cacique Democracy, カシケとはスペイン語でボスの意味)」と呼ばれる政治的エリートによるボス支配で、それが社会全体を覆う伝統的なエリート家族の寡頭支配に組み込まれている。民主主義とは名ばかりで、封建的な権力による支配体制であることは良く知られている。このような社会構造にドゥテルテ現象の真因があるのかもしれない。読者の一人として、わたくしはジョナサン・ミラーには、一個人の政治スキャンダルを超えて、彼のアジア社会に対する深い洞察をその社会構造に分け入り、それを描くために使って欲しかった。そして、フィリピンの将来にとってドゥテルテ大統領の帰結は何かをより良く理解させてほしかった。